

書籍紹介



畑村洋太郎著
講談社

「みる わかる 伝える」

タイトル通り、「みる」編・「わかる」編・「伝える」編の三部構成となっている。各編は7ないし12の小編に分かれ、図も挿入されており、読みやすい。また、随所に登場する事例紹介や、コラム仕立ての「おまけの話」は、内容の複眼的理解の一助となっている。失敗学の主宰者である著者は、表面知だけでなくその裏側にある知識・経験の継承の重要性を指摘されている。世の中の事象の観察力、その理解力、そして他者への伝達力について考究・整理された、興味深い一冊である。

第一部「みる」編では、みる姿勢としての「3現」（現地・現物・現人）の重要性が指摘される。各種メディアが充実し、情報入手の垣根が低くなっているものの、その情報は直接体験として得た事実ではない。「常に目的意識を持って行動し、実際の体験の中で、自分自身で何かを感じたり自分の頭で主体的に考えるのである。これが何よりも大切なことなのだ。本当の知識というのは、こうして体得するものなのである。」(12頁)そして、視点の持ち方を大切にすることや、視点を変えたり時間軸を加えて眺めてみることで、さらには、仮想演習を行ってみることなど、観察力を養うための方法論が説明されている。

第二部「わかる」編では、世の中のすべての事象は「要素」が絡み合う形で「構造」をつくりだしていることを前提として、「わかる」ことの意味が解説される。私たちは頭の中にさまざまなテンプレートをたくさん持っていて、そのテンプレートと外のさまざまな事象とが一致するかどうかで「わかる」「わからない」を判断している。要素や構造が一致した場合は「わかる」ことになるが、頭の中のテンプレートにない事象に直面しても、興味を持った場合は、その事象を理解するための新たなテンプレートが構築される。「そして、この『新たなテンプレートの構築』という作業こそが、『学習』することなのである。」(48頁)そのためには、学校における理論学習だけでは十分ではない。経験を通じて、どんな知識が自分

に足りなかったのかを実感として理解することが必要である。著者はこれを「アクティブ学習」と呼んでいるが、アクティブ学習により、要素の抽出と構造化を通じて目の前の現象を正確に知り、その因果関係を正しく理解する、すなわち「真の科学的理解」に繋がるのだと説く。また、理解力を高めるための工夫として、自分の尺度を持つこと、わかりやすさに騙されないことや思い込み・思いちがいに注意すること、さらには、アナロジーを利用したり具体・抽象の世界を自由に操ることなどが説明されている。

第三部「伝える」編において、著者は、知識が伝わることと「わかる」仕組みとの共通性を指摘する。「ちゃんと伝わったかどうかは、伝達手段の良し悪し（プロセス）で決まるのではない。それは結果として伝える側と伝えられる側とがほぼ同じ状態になっているかどうかで決まるものなのである。」(101頁)私たちの頭は、本当に「この知識が欲しい」と思うようにならないければ、能動的にはならない。ベストの伝え方はむしり取らせることであり、伝える側にはそのための環境作りが重要である。たとえば、完璧なマニュアルを用意しても、ただ与えられるだけではアクティブ学習には繋がらず、またマニュアルの内容もやがては形骸化していく。伝達すべき経験内容の「知識化」とそのための必要な記述が重要なのである。文字と絵の組合せや実物で見せること、表面に出る知識だけでなく失敗経験や思考過程なども重要なこと、さらには、共有知を持つことも大切である。さまざまなところで知識のマニュアル化が進んでいるが、このような裏側の知、暗黙知ないしは共有知の継承場面はむしろ少なくなってきているのではないか。これらの知は、学校の教育課程や職場の研修プログラムだけでは伝えきれないものでもある。著者が最後に紹介している「仕事帰りの一杯」にもあるように、これらの知に敬意を払い、伝達力を高める工夫について、一考の余地がありそうである。

紹介者 東北大学大学院法学研究科 平塚 政宏